序＝断片的ヴィジョン（6）

あらゆる生命現象のみならず、宇宙のすべての現象の物や出来事が発現するには、必ずその前に潜象の過渡がある、ということを感受し、その根源に存在する潜象の存在（アマ始元量）を、物理として認識に出したのが潜象物理。

人間の精神作用には、（現実の意志や感情の背後に、）直接に意識することはできない無意識領域の過程がある。そして、その無意識領域の過程で、我々の無意識のうちに働いているモノがある。この機能を「潜象カン」としてとらえる。

――人間の意志や感情が現実にどのような現れ方をするか？そして、生まれながらの固有振動・の高調（正、反に振動する波動量の鍛練）――は、ひとえにこの「潜象カン」のアリカタ（態勢）にかかっている。

その故にこそ、「潜象カン」を鍛えることがいかに重要であるか？ということを＜認識＞に出すことが必要であり、それにより、自分に意識できないものをどう鍛えるのか？どうすれば向上させられるか？という問題に関心が引き起こされる。

この順序を経て、はじめて、自分の脳によって自分の心（意識できない内心の感受性、則ち潜象カンとよぶモノ）を教へるという逆序のサトリを実行させる基本態勢がととのえられる。

自分たちの生命を支配している潜象の存在を物理として認め、自分の進むべき方向（目標）を知り、それを自分の脳にオシ・ヘル（逆序する）ことにより、自己の内心に、それを感受するアワ性を養うこと。則ち共振波動を以て、カムウツシ・アマウツシをよぶことの出来る「潜象カン」をヨミカエらせること。

このことは、アタマの先の理解ですむことではなく、生命の共振波動（＜ミ＞の生命カン）をもって、内心から変わらなければ、容易に実行し得えない。自己の内心に現状に対する疑念や真実を希求する思念を正直に発生することが、何よりも必要な条件。アタマが良ければ現象カンはいくらでも働くが、潜象カン（アワ性）が鍛えられていなければ、内心の変換・向上はあり得ない（智能的なアタマの良し悪し、智識の量、男女、大人子供、等に関わりなく成り立つ物理。）。

我々の生命を発生し、生存させている潜象の存在が、我々の個体に関わつてくる個体側の接点にあって働く機能＝潜象カン。アワ性（潜象カン）を養うことなしに、マトモな現象判断行為（サヌキ性）をだすことは出来ない。求めれば求める程、底の浅い大脳次元の空転に陥る。しかし、より真実のもの、より高次のものへとあくまでもつきつめていくアワ性さえ失わなければ、（則ち潜在アワ量があれば、）潜象カンは、ゲーテのように遂に極限にいたって転換（ベンドイング）せずにはいないもの。

天然に無限に存在し、＜イノリ＞のココロによって潜象の超光速粒子が同期発生（脳の遺伝子の「アマナ転換」）する＜カムウツシ＞。空気や食物より根源的な、直接アマの素量が注入される、環境からのイノチの補給ともいうべきモノの関わり＜アマウツシ＞。

＜言語＞発生過程、＜呼吸＞、＜食＞、＜性＞、・・・その原理。そして、文明なるものの内実、その転換の根拠――これら一切にかかわる。

個体側のチカラと環境側のチカラとの交流によって、宇宙のあらゆる生物の生命活動（人間、動、植物、鉱物、地球、天体、・・・）がいとなまれている。

個体の外にあってあらゆる生物を存在させているモノ（カムナ）であると同時に、個体の側に於いて、それを受け取り、それによって個々の生存を保っている、個体側の接点にあるモノ（アマナ）。それは、個体の内と外に存在するフタツのモノでありながらアマナによってヒトツに重合し互換しているモノ――潜象の存在。

アマ始元量とカム無限量。

微分量として我々の個体の内と外に存在するものであり、そのことをアマナ・カムナの交流として認識に出すことが、真の直観の基礎（感受性鍛練の根拠）となる。

～1990年5月～

仮装被告（団）